

草津市立矢倉小学校通信 令和元年9月12日 NO.9



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

風邪引くの好き。だって…

「ボク、風邪引くの、好きやねん。」びっくりするようなことを言いだすものだと思っていると、つづけて「だってな、おかあさんがやさしくなるんやもん。」

1年生の朝の健康観察をしているときのことだ。つい笑ってしまったのだが、その場にいた子どもたちは、当たり前のことのようにうなずいていた。もっと甘えたい、いたわってもらいたいというのが、本音なのだろう。これはできたか、あれはどうかと常に点検を受けて…そのような関わりから逃れたいということなのだろうか。子どもも大人も、こうあらねばならないと、たてまえを優先させながら、おどおどして生きているお互いになっていないかと思えてくる。

こんなことを気にしていたとき、1学期に実施された全国学力・学習状況調査の結果が届けられた。(本校の概況は下囲み枠内の通り) 学力面が、そこそこなのだからそれでいいではないかと単純に喜んでいられない通知である。私たち大人、とりわけ教員にとっては、厳しい事実が突きつけられたと受けとめずにいられない。先の、風邪を引きたがっている子の素直な一言が、周囲に居合わせた多くの子どもたちの共感を得ているのは、こうした背景があるからだろうかとも…。

本校では、「居心地のよさ」と「学びがい」のある学校づくりを重点目標に据え、年度当初から「子どもの話をよく聞くこと」や「緊急対応、救急対応の実地トレーニング」に力を入れてきた。

子どもとの関わり方について、ここで強調したいことがある。それは愛情を基盤にした関わり方の「質」と「量」を良質なものにすることである。たとえ傷ついた脳であっても、信頼できる人がすぐそばにいてくれることで心が安定し、自分は価値のある人間だという自覚や自信が育つのだそうだ。さらに、長生きすることにも繋がっているというのだから驚きだ。(友田明美:精神科医「子どもの脳を傷つける親たち」より) 以下に紹介することは、子どもとの関わりだけでなく、大人同士でも小手先のテクニックではなく、本気で実践してもらいたい。 校長 大林 道範

【積極的に使いたいコミュニケーション】

- ①繰り返し 例 「真っ赤なリンゴを描いたよ。」「ほんとだ、真っ赤なリンゴだね。」
子どもが会話の主役になる。 理解してもらっていると受けとめる。
- ②行動を言葉に 例 子どもが絵本を棚に戻す。 「あら、お片付けしてるんだね。」
見てもらっていると受けとめる。 これがよい行動だと認識する。
- ③具体的にほめる 例 「〇〇したね、えらい。」したことを具体的にことばにし、ほめる。
ほめことばが添えられることで、罰や脅かしより意欲が高まる。

学力面 ○国語科・算数科とも市・県の平均、全国の平均よりも上回っている。

▲無回答率が高い。

生活面 ○人の役に立つ人間になりたいと思う。

▲役立ちたいと思っているものの、人が困っていても進んで助けられない。

○読書は好きだ。

▲図書室や図書館の利用・活用をあまりしていない。

▲自分にはよいところがなく、認められたり、ほめられたりしていないと思う。

※ この通信は、これまでの号も含め、矢倉小学校ホームページでもお読みいただけます。